●市町村レポート
Oita City

大分市

幅員100メートルのシンボルロードを計画
様変わりする大分駅とその周辺

市町村合併により関サバも関アジも大分市の産品になった

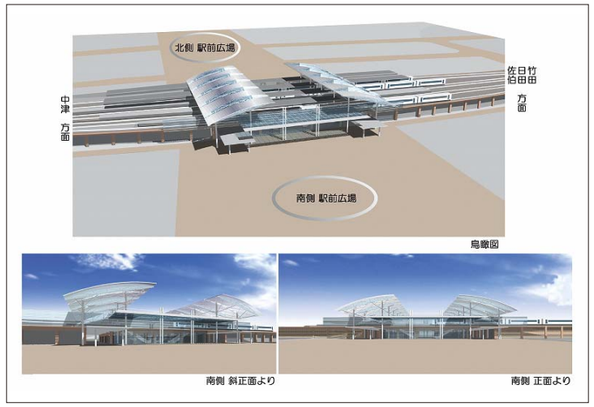
平成の大合併により、全国で市町村合併が相次いでいるが、大分市とて例外ではない。今年、大分市は周辺の佐賀関町、野津原町と合併し、その規模を拡大した。この合併により全国的に名高い佐賀関町の関サバ、関アジも大分市の産品になったわけである。市町村合併にはメリットもデメリットもあるが、観光面に関してはスケールメリットのほうが大きいという。

「お祭りの期間を除いて、関サバ、関アジの一本買いをできる店を探すのは至難の業。大分市の情報発信のノウハウを生かすことにより、佐賀関は漁業に加えて観光客も呼び寄せることができるはずです。観光行政全般に関しては、大分市には宿泊施設がたくさんあるので、県内の観光地を巡る拠点としての役割も十分に果たせるでしょう」（釘宮磐市長）

大分市長　釘宮磐（くぎみや はん）さん

そのまちの顔となるのは駅舎とその周辺である。大分駅を中心とする地区は市民が誇りをもて、来訪者にとっても魅力あふれるまちへと変貌を遂げようとしている。

市内に多数見受けられる地下道や陸橋をどのように改善していくかが課題



キーワードはユニバーサルデザイン。新たなるまちの顔として生まれ変わる大分駅

ユニバーサルデザインで変わる大分駅と周辺地区

大分駅周辺は鉄道により南北が分断されており、駅舎を中心とした一体的な街並みの形成は不可能であった。駅南地区はまさに駅裏の様相で、人々で賑わう駅北地区とは様相を異にしていた。それが今、大規模プロジェクトにより、その様相をダイナミックに変貌させつつある。事業主体は大分駅付近連続立体交差事業（大分県）、大分駅南土地区画整理事業（大分市）、関連街路事業（国・県・市）などで、国・県・市が一体となって事業が進められている。

駅南地区には幅員が100ｍものシンボルロードができる。これまで見たこともない公園のような道ができあがるのであろう。同地区にはすでにデイサービスセンター、在宅介護支援センター、ヘルパーステーション、シルバーハウジングなどで構成される高齢者複合施設が完成し、供用を開始している。

ハードの整備とともに、市民参加のクリーンアップ作戦で美しいまちづくりをめざす

人々の舌を魅了する関サバは、関アジと並ぶ大分を代表する味覚

「人間が地下道を通ったり、陸橋を渡ったりするのは20世紀の遺物。高齢社会では人間が中心になるのは当たり前で、今回の再開発の目玉として、ユニバーサルデザインがキーワードとなるのは自然の成り行き。北はバリアをなくし、南はこれから造るまちなのでバリアをつくらない」と釘宮市長は力を込める。

市・県・国の事業それぞれに統一的にユニバーサルデザインを導入するために、県庁内に今年4月、ユニバーサルデザインの事務局が誕生した。

ハード整備は重要だが、それだけでは美しいまちはつくれない。釘宮市長は毎朝ゴミを拾いながら散歩するのが日課だ。今では500人近くの市職員もゴミ拾いをしている。市民も取り込んだ史上最大のクリーンアップ作戦も行い、日本一クリーンで美しいまちをめざしている。

●市町村レポート
Bungotakada City

豊後高田市

失われた記憶を蘇らせる「昭和のまち」のコンセプトはレトロモダンなまちづくり

豊後高田市長　永松博文さん

「大型店は便利な商店街をポンともってくるようなもの。ハードをいくら整備してもだめで、地域の人が頑張らなくてはどうしようもない」。県の商工労働部長を経験した後、豊後高田市長に就任した永松博文市長はこう言って往時を振り返る。

市長の就任前から、商工会議所には中心商店街の活性化に熱い情熱を傾ける人々がたくさんいた。彼らがめざしたものは豊後高田市がもっとも賑わった昭和30年代の再生で、コンセプトは「レトロモダンな街づくり」であった。

全国的には昭和40年代からだが、豊後高田市は昭和30年代から急激に過疎化した。改修もされずに化石のように残った商店街を有効利用することから、ユニークな中心商店街の活性化は始まった。

昭和30年代を再現したまちを歩けば懐かしさがこみあげてくる

空き店舗が大半を占めるシャッター通りと化した中心商店街は全国に数多く存在し、その惨状は目を覆いたくなるほどだ。

国東半島の中心地として商圏10万人を有した豊後高田市の中心商店街も例外ではなく、昭和30年代をピークに大型店の進出に押されて、他都市と同じく、衰退の道をたどる。都市計画コンサルタントの描いたプランで活性化した例は全国的に見ても皆無に等しく、有効な手段を講じることができないままに、豊後高田市の商店街も年々、行き交う人が減少していた。

「昭和ロマン蔵」では懐かしい駄菓子屋やおもちゃに出会える

その店に代々伝わるめずらしい道具類は貴重な「昭和のお宝」

アイスキャンデーを売るお菓子屋、コロッケを売る肉屋…。商店街に一歩足を踏み入れると昭和30年代の街並みにタイムスリップしてしまう。2000年に実施した「街並みと修景に関する調査事業」では、約7割の商店が昭和30年代以前に建設された建物であることが明らかになり、この調査を受けるかたちで翌年には「商店街街並み修景事業」を行った。この事業は商店の一階軒先を覆う形で取り付けられたパラペットと呼ばれる看板建築物を取り外し、その店舗が建てられた年代に合うように木製やブリキ製の「昭和の看板」に改修することで、このまちがもっとも繁栄した時代を取り戻そうという試みである。

国の空き店舗対策事業も実施し、商工会議所も精力的に空き店舗の解消をめざして、一軒一軒説得して歩いたという。そしてこの年の秋に「昭和のまち」がオープン。年度ごとに事業を拡大し、7軒でスタートした「昭和の店」は30数軒にまで増えた。

まちを歩いて面白いのは、店先に置かれた「お宝」である。昔ながらのショーケースを置いたパン屋、年代物のクラシックカーが人目をひくタクシー会社。これらは市の単独事業である「豊後高田市一店一宝等展示施設整備事業」の成果でもある。その店に代々伝わるめずらしい道具類は、昭和の雰囲気を醸し出すための重要な脇役だ。2002年には日本一の駄菓子屋おもちゃコレクター小宮裕宣さんのコレクションを展示する「昭和ロマン蔵」が開館するなど、事業は進行中だ。市長は「一年ずつ良くなります。来年また来てください」と力を込める。

国東半島には上代の六郷満山文化があり、田染荘は中世の荘園の遺構をほぼ完全なかたちで現在にまで伝えている稀有な例だ。また今年3月の市町村合併により、市内の温泉は6カ所に増えた。これらの観光資源を「昭和のまち」とからめて、どのようにネットワークするかが今後の課題であろう。

古い倉庫を改修した「昭和ロマン蔵」

「昭和ロマン蔵」内にある「昭和の絵本読み語りの部屋」

「行商リヤカー市場」では地域の物産を販売

子どもの頃にタイムスリップしてしまう「昭和の町」

店舗の看板は昭和30年代風のものに改修された

「昭和の町」では郵便ポストも昭和30年代風

昭和30年代にヒットした「ダイハツミゼット」にも出会えます

●市町村レポート
Usuki City

臼杵市

歴史も地理も知り尽くした観光案内ボランティアが知られざるまちの魅力を発信する

うすき かたりべの会代表
小野栄子さん

歴史的な武家屋敷群が残る「二王座地区」

南蛮人がひょいと現れてきそうな大友氏の昔を偲ばせる街並み

ふぐ料理で有名な臼杵市は大友氏が開いた城下町である。海に向かって建造された城塞は明治初期に取り壊されたが、城下町の面影は「唐人町」などの地名や迷路のような道路網に表れている。開発の波に呑まれた城下町が多い中で、このまちは幸か不幸か開闢以来の原型を留めてきた。

「それぞれの通りが昔ながらの町名で、道路の幅1㎝もひろげなければ、狭めもせず、まっ直ぐでも、曲がりくねっても、袋小路でも、またどんな炎暑でも涸れぬ噴き井戸のある四つ辻でも、みぢんも変わらず保たれているから、フランシスコ・大友の支配下に、クリスト教とともに盛んにやって来た紅毛碧眼の商人たちが、どうかしていまの由木に現はれたところで、当時の留守地たる唐人町を見つけるのにさう困らないはずである」

右記はこのまちが生んだ文豪、野上弥生子が戦前に著した「迷路」の一節だが、今でも街並みは当時のままだ。

スローな旅を志向する人々の間で、手つかずの古い街並みが観光スポットとして注目を集めており、年々、観光客が増えている。そして武家屋敷が集中する「二王座歴史の道」の整備などとともに、臼杵観光の一翼を担っているのが市民による観光案内ボランティアである。

満開の桜の下、城跡公園では車いすの人も花見に興じる

郷土史の勉強会からスタートした「うすき かたりべの会」

全国のあちこちで、観光案内ボランティアの人々の姿をよく見かけるようになったが、実際、どのような人がやっているのかという興味も手伝って、臼杵市の案内をボランティアの人にお願いした。案内人は「うすき かたりべの会」会長の小野栄子さんだ。

待ち合わせ場所は観光スポットのひとつ、廃藩置県後に東京に居を移した旧藩主の里帰り用の住宅である「稲葉家下屋敷」。ここが観光のスタート地点になる。この屋敷の由来が書かれた案内板を眺めていると、彼女は現れた。

「建造は明治35年と書かれていますが、かなり疑わしい。明治維新から35年もの月日が流れていますからね。おそらく明治初期に建造され、明治35年に修復されたのでしょう」

その後も、彼女の臼杵に関する知識には驚かされたが、それには理由があった。

「かれこれ30年前になりますか、郷土史家、村上アヤさんが主宰する郷土史の勉強会に参加したのが、生まれ育ったまちを見つめ直すきっかけ。彼女が亡くなられた後も、勉強を続けたいという人が集まって、かたりべの会を立ち上げたしだいです」

現在、うすきかたりべの会はNPO法人格を取得し、観光案内ボランティア事業に加えて、元気な高齢者のサロンなども定期的に開催している。

そのまちに暮らし、そのまちの歴史を旅人に伝える。付け焼き刃の知識には騙されない猜疑心の塊の筆者も、至る所で彼女の説明を聞いて、「うーん、そうか」と相槌を打つばかりだった。

観光案内ボランティアに導かれ一人旅でも、ツアーでもできないディープな経験をする

ヨーロッパの城塞都市のように都市部の面積は小さく、3時間もあれば主な見どころは徒歩で回れる。

行く先々で、顔見知りの人と挨拶を交わし、時には商家でお茶をごちそうになる。野上弥生子の実家は今でも造酒屋を営む商家で、建物の一部を記念館として供用しているが、ここを訪れた際には通りをはさんで店を構える親類宅で、一般には公開していない中庭まで見せてもらえた。生前、その店の祖父が石川啄木と親交があったという珈琲店では、肉親から当時のエピソードの一端を聞くことができた。

一人旅でも、観光ツアーでも、こんな経験はできないに違いない。観光案内ボランティアは、知られざるまちの魅力を発信する貴重な人々だといえる。

このまちには曲がりくねった道路もあれば、急峻な坂道もある。歩きにくいことは確かだが、これらのバリアがまちの魅力でもある。誤解を恐れずにいうなら、このようなまちの場合、ハード的な解決よりもソフト的な解決がよりふさわしい。ボランティアのネットワークをどのように生かしていくかが重要になるだろう。

臼杵城は明治以降、城趾公園として供用されている

旅の情報はここで入手「臼杵市観光情報センター」

臼杵駅前に置かれた臼杵大仏の模型

旅のスタート地点「稲葉家下屋敷」

臼杵では映画「なごり雪」のロケが行われた

●市町村レポート
Takeda City

竹田市

社会科の授業枠を使って小学生がUDグッズを調査し商品企画も手がける

写真上：木の温もりを感じさせる新築校舎に勢揃いした6年1組のみんな
写真下：ユニバーサルデザイン・チームの発表風景

ユニバーサルデザイン・チームは仲良し4人組

大分と熊本を結ぶ豊肥本線の特急で約1時間、車窓の緑はどんどん濃くなっていく。竹田市は熊本県との県境に位置する山深い名水のまちで、楽聖滝廉太郎の「荒城の月」のモチーフとなった岡城趾があることで知られている。

このまちにはユニバーサルデザインを授業に取り入れている小学校がある。一体どんな小学校なのだろうという好奇心が竹田市へ向かわせた。竹田市広報担当の吉野秀樹さんの案内で向かったのは南部小学校。建て替えられたばかりの校舎は県産材を多用した木の温もりを感じさせる学舎だった。

同校では昨年度、六年生の社会科の授業で「暮らしと政治」をテーマに生徒自身がテーマを決めて、グループ研究を進めた。テーマは「竹田のバリアフリーを調べよう」「入田名水をもっと広めよう」「竹田の観光を知ろう」「ユニバーサルデザインを考えよう」「竹田の環境をゴミ中心に考えよう」の5つ。ユニバーサルデザインのグループは本田桂子さん、阿南玲美さん、阿南晴香さん、高橋友理さんら4人の仲良しグループだ。彼女たちはユニバーサルデザインの製品にしぼって調査し、3学期だけという短期間にもかかわらず、新製品の提案までしてしまうのだ。

竹田市立南部小学校6年1組担任教諭（当時）の吉野洋子さん

スーパーマーケットでの製品撮影からフィールド調査は始まった

中学校に進学する前の春休み中にもかかわらず、生徒4人と担任教諭の吉野洋子さんが教室に集まってくれた。「調査、発表からなるこの授業は子どもたちの自主性を伸ばし、発想力を豊かにすることが目的でした」と吉野さんは振り返る。

学校近くのスーパーマーケットの協力を取り付け、デジタルカメラでこれはと思うものを撮影することから調査は始まった。子どもたちの興味はどんどん膨らんでいく。

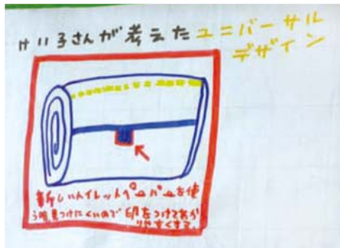
「Eメールやファクスでメーカーへ直接質問するなど、この授業で子どもたちの自主性がぐんと伸びました」

生徒たちが独自の視点で集めた製品群はありきたりのユニバーサルデザインのグッズ・セレクションに比べて新味が感じられた。「昨日食べたふりかけの袋、開けやすかったよ」。こんな発言を皮切りに4人で話し合い、ユニバーサルデザイン製品を選んでいったという。

最後の授業は学級全員の前での研究発表だが、このチームは商品企画まで考えていた。

「ユニバーサルデザインが私たちの生活の中で大切なものとの意識づけができればよいと考えていましたが、市販品の改善点まで指摘するのにはびっくりさせられました」

担当教諭が驚かされるほど、生徒たちは短期間でユニバーサルデザインとは何かを理解した証しだろう。



一人ひとりがユニバーサルデザインの商品を提案

子どもの視点でユニバーサルデザイン度を考える

最寄りのスーパーマーケットでフィールド調査

メーカー企業に商品企画を提案する「恐るべき子どもたち」

生徒たちの商品企画にはこれはと思うものもあれば、突飛すぎて企画とはいえないものもある。玉石混淆（ぎょくせきこんこう）だ。ともかく彼女たちは自分たちが考えたすべての企画をそれぞれのメーカー企業に送った。

こんな時に企業姿勢が垣間見られるものだが、返事があったのはわずか1社で、残りの企業には黙殺されてしまった。その企画とは「トイレットロールのユニバーサルデザイン」で、弱視者にはロールの切れ目がわかりにくいので切れ目に赤色を付けるという提案だった。生徒たちは「やりやすくん」という新商品のネーミングまで提案していた。

返事があったのは王子ネピア㈱商品開発センターからで、文面には製品化できない理由が丁寧に記されていた。少し長いけれど紹介しよう。

「やりやすくんの付け方は、印刷する、矢印を貼り付ける、などいろいろ方法があると思われるが、高速で生産されているためトイレットロールの最初の部分に正確に付けていくことがむずかしい。または実施するのは人手によるものになり費用がかかる」

今後の方針についても「ユニバーサルデザインはわかりにくいものをわかりやすくする、使いにくいものを使いやすくするということを基本と考えます。生産の都合上、いろいろ実現しにくいことはありますが、少しでもそういったユニバーサルデザインの趣旨にあった商品づくりを行っていきます。今後ともご期待ください」と書かれていた。

小学生の提案にも真摯に応える企業姿勢は敬服に価する。

この提案をした少女は「将来、ユニバーサルデザインのデザイナーになりたい」と、目を輝かせていた。

竹田市立南部小学校の外観

竹田市は名水のまちでもある

ここを通るとメロディーが流れる滝廉太郎トンネル